

博士論文（要約）

論文題目 近世中後期における加賀藩前田家と朝幕藩関係

氏名 千 葉 拓 真

## 目次

### 序論

#### 第一部 加賀藩前田家における公家との交際

##### 第一章 公家との「通路」

##### 第二章 公家との縁組

##### 第三章 交際および儀礼のシステムとその担い手

#### 第二部 儀礼をめぐる朝幕藩関係と加賀藩前田家

##### 第一章 家督相続儀礼と朝廷

##### 第二章 書札礼と公武の序列

##### 補論 公家との交際と家格 - 使者取扱を中心に -

##### 第三章 京都情報と有職知の収集

#### 第三部 加賀藩京都藩邸の構造と機能

##### 第一章 京都藩邸研究の現状と課題

##### 第二章 加賀藩京都藩邸の位置と空間構造

##### 第三章 加賀藩京都藩邸の構成員と機能

### 終章

### 図表

本文

○第三部第二章の「地図」については、図の著作権者の同意が得られていない。

○博士論文の全体を『近世大名と天皇・朝廷』（仮）として5年以内に出版する予定である

## 参考文献一覧

- ・朝尾直弘「将軍政治の権力構造」(『岩波講座 日本歴史一〇』一九七五)
- ・朝尾直弘「幕藩制と天皇」(原秀三郎ほか編『大系日本国家史三』東京大学出版会一九七五、のち『朝尾直弘著作集三 将軍権力の創出』岩波書店二〇〇四に再録)
- ・阿部裕樹「幕末期鳥取藩京都藩邸の所在と拡大」『鳥取地域史研究』一二 二〇一〇
- ・阿部善雄「大名叙位をめぐる文書」『古文書研究』三 一九七〇
- ・荒木裕行「近世後期溜詰大名の「交際」とその政治化」『史学雑誌』一一二 - 六 二〇〇三
- ・家近良樹『幕末の朝廷 - 若き孝明帝と鷹司関白』(中央公論社二〇〇七)
- ・石井良助『天皇 - 天皇の生成および不親政の伝統』(講談社学術文庫二〇一一)
- ・市島謙吉編集・校訂『新井白石全集』六 一九〇七
- ・市野千鶴子「三条西実教の塾居をめぐる」『書陵部紀要』四六 一九九四
- ・伊藤孝幸『交代寄合高木家の研究 - 近世領主権力と支配の特質 - 』(清文堂二〇〇四)
- ・稲垣知子「近世大名の家格と婚姻再論」(林董一博士古稀記念論文集刊行会編『近世近代の法と社会』一九九八)
- ・稲垣知子「近世大名の家格と婚姻 再論」『東海地域文化研究』九 一九九八
- ・稲垣知子「近世大名の婚姻範囲」『法制史研究』五〇 二〇〇〇
- ・井上勝生「幕末公家の政治空間 - 縁家を中心に - 」(笠谷和比古編『公家と武家Ⅱ』思文閣出版一九九九)
- ・井上智勝『近世の神社と朝廷権威』(吉川弘文館二〇〇七)
- ・岩淵令治『江戸武家地の研究』(塙書房二〇〇四)
- ・内野豊大「越前松平家・加賀前田家の家格と陪臣叙爵について一十七世紀後期における」『中央史学』二七 二〇〇四
- ・梅田千尋『近世陰陽道組織の研究』(吉川弘文館二〇〇九)
- ・大口勇次郎「国家意識と天皇」(朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史一五 近世五』岩波書店一九九五)
- ・大久保利謙『明治維新の政治過程』吉川弘文館一九八六
- ・大塚隆編・解説『慶長昭和京都地図集成』(柏書房一九九四)
- ・大友一雄『日本近世国家の権威と儀礼』(吉川弘文館一九九九)
- ・大野瑞男「解題」(国立史料館編『寛文朱印留』上 東京大学出版会一九八〇)

- ・岡崎寛徳『近世武家社会の儀礼と交際』（校倉書房二〇〇六）
- ・小田部雄次『華族—近代日本貴族の虚像と実像』（中央公論社二〇〇六）
- ・小野将「近世後期の林家と朝幕関係」『史学雑誌』一〇二 - 六 一九九三
- ・『加賀藩史料』第一編～幕末編
- ・笠谷和比古「平松家文書解題」（『史料館所蔵史料目録』三一集一九八〇）
- ・笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館一九九三）
- ・笠谷和比古『江戸御留守居役』（吉川弘文館二〇〇〇）
- ・加藤昌宏「秋田藩上方詰本方奉行の役割について」『国史談話会雑誌』三六 一九九五
- ・金沢市史編さん委員会『金沢市史資料編三 近世一』金沢市一九九九
- ・金沢市史編さん委員会『金沢市史 通史編二近世』金沢市二〇〇五
- ・金沢市立図書館編『加越能文庫解説目録』上巻 金沢市立図書館一九七五
- ・金沢市立図書館編『加越能文庫解説目録』下巻 金沢市立図書館一九八一
- ・『寛政重修諸家譜』続群書類従完成会
- ・衣笠安喜「幕藩制下の天皇と幕府」（『天皇制と民衆』東京大学出版会一九七六）
- ・木村礎・藤野保・村上直編『藩史大事典』六 雄山閣出版一九九〇
- ・久保貴子「基熙公記にみえる公家と大名」（瀧澤武雄編『中近世の史料と方法』東京堂出版一九九一）
- ・久保貴子「江戸時代における公武婚姻—池田輝子を事例として—」（『岡山地方史研究』六八 一九九二）
- ・久保貴子「武家社会に生きた公家女性」（『日本の近世一五 女性の近世』中央公論社一九九三）
- ・久保貴子『近世の朝廷運営』岩田書院一九九八
- ・久保田啓一「堂上和歌の伝統と文化圏」（中野三敏編『日本の近世一二 文学と美術の成熟』中央公論社一九九三）
- ・来見田博基「武家官位にみる本・支藩関係—長門長府藩の位階昇進運動を素材として」『日本歴史』六七 - 二〇〇四
- ・黒板勝美編国史大系第四十五巻『徳川実紀』第八篇 吉川弘文館一九六五
- ・ケイト・W・ナカイ『新井白石の政治戦略』（東京大学出版会二〇〇一）
- ・小宮木代良『江戸幕府の日記と儀礼史料』（吉川弘文館二〇〇六）
- ・近藤磐雄編『加賀松雲公』上・中・下巻 羽野知顕（出版者）一九〇九

- ・佐々木克「「公武合体」をめぐる朝幕藩関係」（田中彰編著『日本の近世一八 - 近代国家への志向』中央公論社一九九四）
- ・澤博勝『近世宗教社会論』（吉川弘文館二〇〇八）
- ・清水善仁「江戸時代の縁家について—武家から公家への助力金を中心に—」『中央史学』二八 二〇〇五
- ・下橋敬長述・羽倉敬尚注『幕末の宮廷』（平凡社一九七九）
- ・白根孝胤「近世大名家臣の隠居・家督・継目御礼と家格認識」（『徳川林政史研究所研究紀要』三五 二〇〇一）
- ・白根孝胤「近世大名家臣の官位叙任と幕藩権力—尾張家を中心に—」『徳川林政史研究所研究紀要』三七 二〇〇三
- ・白根孝胤「天皇即位における「諸大夫」年寄と公武関係」『徳川林政史研究所研究紀要』三八 二〇〇四
- ・白根孝胤「御三家の官位叙任と幕藩権力—尾張家を中心に—」『徳川林政史研究所研究紀要』三九 二〇〇五
- ・白根孝胤「御三家における縁戚関係の形成と江戸屋敷」（『徳川林政史研究所研究紀要』四一 二〇〇七）
- ・白根孝胤「尾張家における「両敬」の形成と将軍権威」（岸野利彦編『尾張藩社会の総合研究』四 清文堂二〇〇九）
- ・新編弘前市史編纂委員会編『新編 弘前市史』通史編二近世一（弘前市二〇〇三）・同通史編三近世二（弘前市二〇〇三）・同資料編二近世編一（弘前市一九九六）・同資料編三近世編二（弘前市二〇〇〇）
- ・杉森哲也「呉服所と京都 - 秋田藩を事例として - 」『年報 都市史研究』七 一九九九
- ・杉森哲也『近世京都の都市と社会』（東京大学出版会二〇〇八）
- ・高木昭作「最近の近世身分制論について」（『歴史評論』四〇四 一九八三）
- ・高木昭作『将軍権力と天皇』（青木書店二〇〇三）
- ・高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』（東京大学出版会一九八九）
- ・高埜利彦「一八世紀前半の日本」（『岩波講座日本通史 近世三』岩波書店一九九四）
- ・高埜利彦『江戸幕府と朝廷』（山川出版二〇〇一）
- ・高埜利彦編『朝廷をとりまく人びと』（吉川弘文館二〇〇七）
- ・高埜利彦『近世の朝廷と宗教』吉川弘文館二〇一四

- ・高野信治「「藩」研究のビジョンをめぐって」『歴史評論』六七六 二〇〇六
- ・高橋博「大名佐竹家の婚姻・通婚圏と幕藩関係」『学習院史学』三二 一九九四
- ・高橋博『近世の朝廷と女官制度』（吉川弘文館二〇〇九）
- ・田島公『禁裏・公家文庫研究』一 - 四（思文閣出版二〇〇三 - 一二）
- ・帯刀千秋「加賀藩前田家の縁組に関する考察」（田中喜男編『日本海地域史研究』六 一九八四）
- ・田中暁龍「公家衆の江戸参向 - 江戸の武家文化との一つの接点 -」（竹内誠編『近世都市江戸の構造』三省堂一九九七）
- ・田中暁龍『近世前期朝幕関係の研究』吉川弘文館二〇一一
- ・田中暁龍『近世朝廷の法制と秩序』山川出版社二〇一一
- ・田中暁龍「近世の天皇・朝廷研究の到達点と課題」（『歴史評論』七七一 二〇一四）
- ・千葉一大「近世大名の身分と格式」『日本歴史』五九九 一九九八
- ・塚田孝『近世の都市社会史』（青木書店一九九六）
- ・塚田孝氏「身分的周縁論 - 勸進の併存を手がかりとして -」（『日本史講座六 近世社会論』東京大学出版会二〇〇五）
- ・辻達也『享保改革の研究』（創文社一九六三）
- ・辻達也編著『日本の近世二 天皇と将軍』（中央公論社一九九一）
- ・東京大学史料編纂所編 大日本近世史料『広橋兼胤公武御用日記』四（東京大学出版会一九九七）
- ・時野谷勝「嘉永・安政期の朝幕関係」（『待兼山論叢』一 一九六七）
- ・徳川黎明会『江戸時代の古文書を読む 文化・文政の世』（東京堂出版二〇〇七）
- ・徳田寿秋『前田慶寧と幕末維新』（北国新聞社二〇〇七）
- ・中川学『近世の死と政治文化』（吉川弘文館二〇〇九）
- ・長野暹「宝暦明和期における大名・家臣の家督相続」『西南地域史研究』一二 一九九七
- ・永原慶二・山口啓二 対談「日本封建制と天皇」『歴史評論』三一四 一九七六
- ・難波信雄「仙台藩の京都留守居と遊歴生 - 維新时期の情報収集システムと関連して -」（『日本歴史』七二三 二〇〇八）
- ・西田真樹「「交代寄合」考」『宇都宮大学教育学部紀要』三六 一九八六
- ・西村慎太郎『近世朝廷社会と地下官人』吉川弘文館二〇〇八
- ・西村慎太郎「近世公家家職の展開と内侍所神楽」（『歴史評論』七七一 二〇一四）

- ・野村玄『日本近世国家の確立と天皇』清文堂二〇〇六
- ・野村玄『天下人の神格化と天皇』思文閣出版二〇一五
- ・平成九年度科研費報告書 橋本政宣氏『近世武家官位をめぐる朝幕藩関係の基礎的研究』一九九七
- ・橋本政宣編著『近世武家官位の研究』（続群書類従完成会一九九九）
- ・橋本政宣『近世公家社会の研究』（吉川弘文館二〇〇二）
- ・長谷川成一『津軽藩』吉川弘文館二〇〇四
- ・畑尚子『徳川政権下の大奥と奥女中』（岩波書店二〇〇九）
- ・尾藤正英『江戸時代とはなにか』岩波書店一九九二
- ・平井誠二「江戸時代の婚姻—公家と武家の場合—」（『姓氏と家紋』六一 一九九一）
- ・平井誠二「前期幕藩制と天皇」（永原慶二ほか編『講座 前近代の天皇二 天皇権力の構造と展開その2』青木書店一九九三）
- ・深井甚三「近世後期、城下町金沢の菓子屋と菓子について」『和菓子』八 二〇〇一
- ・深井雅海『江戸城』（中公新書二〇〇八）
- ・深谷克己『状況と歴史学』校倉書房一九八四
- ・深谷克己『近世の国家・社会と天皇』校倉書房一九九一
- ・福田千鶴『江戸時代の武家社会』（校倉書房二〇〇五）
- ・服藤弘司『大名留守居の研究』（創文社一九八四）
- ・福留真紀『名門譜代大名・酒井忠挙の奮闘』（角川書店二〇〇九）
- ・福留真紀『将軍側近柳沢吉保』（新潮社二〇一一）
- ・藤井讓治『幕藩領主の権力構造』（岩波書店二〇〇二）
- ・藤川昌樹「徳川期京都における武家屋敷の成立」（宮崎勝美・吉田伸之編『武家屋敷 - 空間と社会』山川出版社一九九四）
- ・藤川昌樹「土井家京都邸の構成とその変遷」『泉石』九 二〇一〇
- ・藤田覚『近世政治史と天皇』吉川弘文館一九九九
- ・藤田覚「天保期の朝廷と幕府」（『日本歴史』六一六 一九九九）
- ・平成一六年度科研費報告書 藤田覚氏『儀礼をめぐる朝幕藩関係の研究』二〇〇四
- ・藤田覚『近世天皇論 - 近世天皇研究の意義と課題』清文堂二〇一一
- ・堀新「岡山藩と武家官位 - 池田綱政の少将昇進をめぐる - 」『史観』一三三 一九九五
- ・堀新「近世武家官位試論」『歴史学研究』七〇三 一九九七



- ・堀新「大名の官位と「家政」「国政」 - 武家官位の在地効果説をめぐって -」（岡山藩研究会編『藩世界の意識と関係』岩田書院二〇〇〇）
- ・前田土佐守家資料整理調査委員会編『前田土佐守家資料館所蔵目録』金沢市二〇〇一
- ・松尾美恵子「大名の殿席と家格」『徳川林政史研究所研究紀要』昭五五年度 一九八一
- ・松方冬子「両敬の研究」（『論集きんせい』一五 一九九三）
- ・松方冬子「「不通」と「通路」 - 大名の交際に関する一考察」（『日本歴史』五五八 一九九四）
- ・松方冬子「近世中・後期大名社会の構造」（宮崎勝美・吉田伸之編『武家屋敷 - 空間と社会 -』山川出版一九九四）
- ・松澤克行「近世の家礼について」『日本史研究』三八七 一九九四
- ・松澤克行「元禄文化と公家サロン」（高埜利彦編著『日本の時代史一五 元禄の社会と文化』吉川弘文館二〇〇三）
- ・松澤克行「公武の交流と上昇願望」（堀新・深谷克己編『権威と上昇願望』吉川弘文館二〇一〇）
- ・松澤克行「近世の公家社会」（大津透ほか編『岩波講座日本歴史一二 近世三』岩波書店二〇一四）
- ・松平（上野）秀治「大名家格制についての問題点 - 官位制を中心に -」（『徳川林政史研究所研究紀要』昭四八年度 一九七三）
- ・松村明校注『折たく柴の記』（岩波書店一九九九）
- ・三浦俊明『近世寺社名目金の史的研究』吉川弘文館一九八三
- ・水林彪「武家官位制」（永原慶二他編『前近代の天皇三 天皇と社会諸集団』青木書店一九九三）
- ・三宅正浩『近世大名家の政治秩序』（校倉書房二〇一四）
- ・宮澤誠一「幕末における天皇をめぐる思想的動向 - 水戸学を中心に -」（『歴史学研究』別冊一九七五）
- ・宮下和幸「幕末における加賀藩京都詰の実態とその意義」『日本歴史』六九六 二〇〇六
- ・宮地正人『天皇制の政治史的研究』校倉書房一九八一
- ・村和明『近世の朝廷制度と朝幕関係』東京大学出版会二〇一三
- ・森岡清美『真宗教団と「家」制度』（創文社一九六二）
- ・森岡清美『華族社会の「家」戦略』（吉川弘文館二〇〇二）

- ・森下徹「萩藩大坂蔵屋敷の成立」(塚田孝編『身分的周縁の比較史』清文堂出版二〇一〇)
- ・母利美和「近世大名と公家—公武間交際における「由緒」と「通路」—」『新しい歴史学のために』二六〇 二〇〇六
- ・山口和夫「近世の家職」(朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史一四 近世四』岩波書店一九九四)
- ・山口和夫「近世天皇・朝廷研究の軌跡と課題」(永原慶二ほか編『講座 前近代の天皇』五 青木書店一九九五)
- ・山口和夫「天皇・院と公家集団-編成の進展と近世朝廷の自律化、階層制について」(『歴史学研究』七一六 一九九八)
- ・山口和夫「朝廷と公家社会」(『日本史講座六 近世社会論』東京大学出版会二〇〇五)
- ・山口和夫「近世の朝廷・幕府体制と天皇・院・摂家」(大津透編『王権を考える』山川出版社二〇〇六)
- ・山本博文『江戸お留守居役の日記』(読売新聞社一九九一)
- ・山本博文「幕藩制国家」(『歴史学事典一二 王と国家』弘文堂二〇〇五)
- ・山本博文『徳川将軍家の結婚』文春新書二〇〇五
- ・吉田伸之「巨大城下町 - 江戸」(朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史第一五巻 近世五』岩波書店一九九五)
- ・吉田昌彦『幕末における「王」と「覇者」』(ぺりかん社一九九七)
- ・若林喜三郎『前田綱紀』吉川弘文館一九六一
- ・若林喜三郎『加賀藩農政史の研究』下(吉川弘文館一九七二)
- ・渡辺優「近世天皇即位式における藩の動向」『ヒストリア』一六二 一九九八

## 論文の内容の要旨

1970年代の近世史研究においては、いわゆる幕藩制国家論が盛んになり、多様な要素を含み込む形で、近世の国家像を豊かにしようと試みられた。近年ではそれに対する反省がなされつつある一方、朝廷・幕府・藩の三者相互の関係によって、近世国家の構造を解明しようとする朝幕藩関係という視点が提示された。

そうした70年代以降の近世史研究における動向の中で、大きく進展した研究分野の一つが、天皇・朝廷に関する研究である。現在では近世における天皇・朝廷を、幕藩制国家において一定の役割を果たす一部・身分集団であるとする認識が通説となるにいたった。

しかし、近年の天皇・朝廷研究は、公家や門跡らの活動が江戸や京都にとどまらないことが明らかにされつつありながらも、朝廷を構成する公家や門跡らの全国的な動向には不明な点が多く、依然として天皇・朝廷の、近世の国家や社会における位置づけをどのようにとらえるか、が大きな課題となっている。こうした課題を克服するためには、天皇家や公家の家などに伝来した史料群はもちろん、これら以外の史料群における天皇・朝廷関係史料にも目を向ける必要があり、本論文では、特に近世において天皇・朝廷と様々な関係を有した大名家に伝来した史料群に含まれる、天皇・朝廷関係史料に注目したい。

近年では、大名家、あるいは藩に関する諸研究においても、朝廷や公家の存在が認められつつある。近世国家が幕府や藩はもちろん、天皇・朝廷をもその構成要素としており、前述のような課題が存在していることを踏まえれば、近世国家の構造を解明する上で、大名と天皇・朝廷との関係を検討することが大変重要な課題として浮上する。

しかし、大名と天皇・朝廷との関係は、幕府が関与しているケースも多く、その影響力は絶大である。従って両者の関係を、単に二者の関係としてのみ捉えることは必ずしも適切ではない。加えて天皇・朝廷との関係は、各大名家の抱える種々の問題との連関の中で捉える必要があると考えられることから、朝幕藩関係という視点から、各大名が置かれた状況を丁寧に分析しつつ検討することが重要となり、こうした分析によって近世の国家像をより豊かなものとするのが可能となるのではないかと考えられる。大名と天皇・朝廷との関係は、諸研究の中で、公家と大名の間には、大名や旗本との交際と同様に「通路」や「両敬」の関係があり、儀礼や文化交流、婚姻、財政援助など、様々な関係の存在したことが明らかにされており、大名諸家と公家との関係は、各家によって異なった様相を呈している。こうした研究成果は、大名と天皇・朝廷との関係を、大名家の動向全体に位置づけ、幕府や他大名らとの関係を踏まえつつ論じることの必要性と重要性を提起している

と考える。だが大名と天皇・朝廷との関係は、近世国家を論じる上で重要な論点でありながら、研究が進んでいない分野であると言わざるを得ない。

本論文では上記の問題を解決するため、①公家との縁組、または交際の存在を確認でき、その過程を再現可能な史料が伝存していること、②幕藩関係や藩政の問題など、御家や藩政、幕藩関係などに関する重要な課題について十分に検討可能なだけの史料が伝存していること、以上の条件を満たす大名として、加賀藩前田家、中でも五代藩主綱紀の時代以降を事例として分析する。天皇・朝廷との関係はもちろん、前田家の動向を考える上で、綱紀の時期が重要な画期になったと考えられるからである。

以上を踏まえて、特に①大名と公家との交際および縁組の実態とそのシステムを明らかにし、朝廷との関係がどのような背景のもとに形成されたのか、②大名と天皇・朝廷との関係の在り方がよくあらわれる事例として儀礼を取り上げ、両者の関係の中で儀礼が持った意義は何か、そして儀礼に際してどのような対策を講じていたのか、③天皇・朝廷との関係を下支えしていたと考えられる、京都藩邸の実態について検討し、それが天皇・朝廷との関係の中でどのような意味を持ったのか、といった点について検討を加えた。

加賀藩前田家と公家との交際（「通路」）および縁組は、時期によってその内容が変化し、幕藩関係および藩政や朝幕関係といった要素に左右される側面を有していた。そして公家との「通路」は藩主家との縁戚関係や旧縁、公家家職の有用性などに基づいて形成され、大名家の運営に影響を与えていた。さらに京都における儀礼および公家・門跡らとの交際は、血縁関係などを介して、江戸や地方城下町における大名らとの交際とも連動していた。京都は公家・門跡との交際などに加え、武家との交際においても、江戸とともに一つの中心軸（結節点）として機能した。

そして儀礼上の前田家と天皇・朝廷との関係は、江戸幕府による大名編成の問題、そしてその中での前田家の序列をめぐる問題と非常に密接に関連しながら展開していった。将軍を頂点としながら、天皇・朝廷を含みこんだ儀礼によって大名の編成がなされたことで、複雑かつ曖昧な公武間の秩序が形成され、前田家と天皇・朝廷との関係をめぐる動向もこれに大きく左右された。特に前田家では、前田綱紀が御三家並の家格を将軍綱吉に認められて以降、次代へその家格を継承することが課題として浮上し、家督相続儀礼や書札礼の整備などによってこれへ対処した。

家督相続時における禁裏・仙洞などへの献上は、前田家が御三家に準じる家格であることを示す儀礼であり、将軍を頂点とする武家領主間での儀礼の一環であった。また書札礼

にあらわれたような近世における公武の序列は、公武それぞれが別の序列体系を形成する方向に向かいながら、公家と武家の序列体系はある程度の対応関係を有していたといえよう。この点にも天皇・朝廷を取り込むことで成立し、公家と武家との様々な関係が持続した、近世における公武の序列の特質が表れている。こうした近世における公武の序列は、近世の国家や権力編成、そして政治問題や対外関係などとも連動する問題であった。

儀礼や公家らとの交際を行う上では、有職故実や京都の動向などに関する情報や知識が必要とされ、各大家は有職故実や京都の動向に関する知識や情報を求め、その収集を担わせる存在を必要とした。そうした存在が有職方をつとめた平田内匠家や呉服所などであった。しかし、現実の交際と前田家の家格意識は、必ずしも一致していたわけではなかった。家格意識と現実の交際は別の論理によって展開し、家格意識に必ずしもとられない柔軟な交際が行われたと考えられる。

加賀藩による儀礼や交際、そしてそれらに関わる情報の収集において、平田内匠家や呉服所などとともに重要な役割を果たしていたのは、京都藩邸をはじめとした畿内近国の藩政機構であった。京都藩邸は財政上の拠点であるとともに、儀礼や政務を担うスペースが単独では存在しないながらも、儀礼的な役割も求められていた。そして加賀藩が京都藩邸および京都詰の藩士に期待した役割を簡潔に述べるならば、幕府役人との折衝、公家との交際や加賀藩から禁裏への使者派遣時の対応などに加え、大坂および大津から銀を収納・管理すること、そして贈答品や衣服および調度品などを京都において調達することであったと考えられる。加えて大津などに存在する蔵屋敷の管理や年貢米の売却などもその一環であった。西国における情報の収集などに関わっていた点も京都藩邸および京都詰藩士の特徴であったといえる。そして19世紀初頭には幕府役人との折衝や京都を中心とした儀礼および交際への対応も重要な役割となっていた。公家との交際が拡大し、儀礼の中に天皇・朝廷の存在が含みこまれたことで、公家や寺社への助力や物品の購入などを行っていた京都藩邸の役割は大きくなっていき、その機能は、時代が下るにつれて多様化していったといえる。京都藩邸など、畿内近国における藩政機構が連携し、公家や寺社との交際、および京都以西における儀礼などに対処していたのである。

近世における大名と天皇・朝廷との関係は、経済的・身分的安定の中で、江戸と京都を中心とし、地方城下町を含みこむことによって、広範囲にかつ長期的に展開した。幕府が諸集団を編成する手段として用いた儀礼においては儀礼を滞りなく執行するため、歴史的な由来や慣習、文化などを異にする交際相手との情報交換や相互補助が必要不可欠となり、

全国規模で拡大した公家、大名、寺社の交際は、大名家の運営などの問題にも影響を及ぼすようになった。そうした中、大名と天皇・朝廷との関係は、様々な存在を抱え込み、時には大名側が公家らへ経済的な援助などを行い、京都藩邸に一定の役割を担わせることで安定的に維持されていたといえるであろう。

以上が近世における大名家と天皇・朝廷との関係をめぐる基本的構造であった。そしてこのように形成された関係は、幕末にいたって変質しつつも、京都が政治の表舞台となる中で機能し続けたと考えられる。しかし、近世において展開していたこのしくみは、明治維新によって、江戸幕府によってつくられた制度とともに崩壊し、華族となった旧公家や旧大名による活動は、江戸時代からのつながりを残しつつも、かつてとは異なった形で展開していくことになるのである。

しかしながら、本研究では、①加賀藩以外を中心軸とした検討、②加賀藩との関係のみに特化せざるを得なかった存在、③加賀藩における事例の普遍性と特殊性という問題について大きな課題を残した。これらは今後研究を進めていく上で重要になる論点である。